

令和 2 年度（第 64 回）  
岩手県教育研究発表会発表資料

【特設分科会 3】生徒指導

平成 31・令和 2 年度魅力ある学校づくり調査研究事業  
宮古市立第一中学校区の取組

令和 3 年 2 月 9 日  
宮古市教育委員会  
宮古市立第一中学校  
加藤 浩和  
宮古市立宮古小学校  
菊池 伸  
宮古市立山口小学校  
菅原 純  
宮古市立亀岳小学校  
黒澤みほ子  
宮古市教育委員会  
信夫辰規

## 目 次

I	研究目的	1
II	研究の方向性	1
III	研究の内容と方法	1
IV	調査研究事業の内容	2
1	「魅力ある学校づくり調査研究事業」における「不登校」の基本的な考え方	2
(1)	不登校の「新規数」と「継続数」	2
(2)	「魅力ある学校づくり調査研究事業」において対象とすべき児童生徒	3
2	「魅力ある学校づくり」に関する基本的な考え方	4
(1)	「魅力ある学校」とは	4
(2)	「居場所づくり」「絆づくり」とは	4
(3)	「計画的・継続的に点検・見直しを行う」とは	5
(4)	「浸透度」とは	6
(5)	「教職員の取組」とは	6
3	宮古市教育委員会における「魅力ある学校づくり調査研究事業」の取組の具体	7
(1)	「魅力ある学校づくり」推進委員会、主任合同会議の開催	7
(2)	「魅力ある学校づくり」全体計画	8
(3)	「意識調査の結果」と「P D C Aシート」	8
(4)	小中連携、小小連携に係る「部会ごとの取組」	9
ア	「つながり合う」部会の取組	9
イ	「かがやき合う」部会の取組	11
ウ	「まなび合う」部会の取組	13
4	モデル校における「魅力ある学校づくり調査研究事業」の取組の具体	15
(1)	宮古市立第一中学校の取組	15
(2)	宮古市立宮古小学校の取組	17
(3)	宮古市立山口小学校の取組	19
(4)	宮古市立亀岳小学校の取組	21
V	研究のまとめ	23

## I 研究目的

不登校については、各地域において、未然防止（全ての児童生徒対象）、初期対応（不登校の兆しが見えた児童生徒対象）、自立支援（不登校状態にある児童生徒対象）の取組が行われてきた。

しかし、近年、全国における不登校児童生徒数が増加傾向にあり、宮古市においても例外ではない。不登校に対する各校の取組が、各校の不登校児童生徒の現状に対応したものとなっているかを改めて検証し、状況によって取組を改善することが求められている。

当市は、山間部の川井・新里地区、北部の田老地区、宮古市部に大きく分けられ、県内一の面積を有する自治体である。学校数は小学校15校、中学校11校で、宮古市部に位置する研究推進中学校区の学校の構成は、生徒数200名規模の中学校1校と児童数200名規模の小学校2校、複式学級を有する小学校1校である。研究推進中学校区を含め、東日本大震災により甚大な被害を受け、平成28年に発生した台風10号によっては数日間の休校を余儀なくされ、児童生徒の教育活動に大きな影響を受けた。

宮古市教育委員会は、これまで被災した子どもたちへの就学支援や心身のケアに取り組んできたが、保護者の経済格差等による不安からの影響も大きく、心とからだの健康観察における要サポート児童生徒数も増加を辿っている。また、震災時に適切な養育を受けることができず、愛着障がい等から集団生活に適応できない小学校低学年の児童も増えている。さらに、不登校児童生徒数を見ると、解消されている児童生徒がいる一方で、中学校へ進級する段階で新規不登校生徒が大きく増加している状況も見られ、今後においても大きな課題となることが予想される。

こうした中で、児童生徒の自己有用感を高める子どもたちの「居場所づくり」と子どもたちの「絆づくり」を充実させ、組織的・効果的な小中連携・小小連携に取り組み、児童生徒の不登校未然防止の取組について調査研究を行い、調査結果を市内・県内へ普及する必要があると考えた。

## II 研究の方向性

本事業の実施に当たり、第一中学校区（宮古市立第一中学校・宮古市立宮古小学校・宮古市立山口小学校・宮古市立亀岳小学校）をモデル学区として指定した。

複数の小学校からなる中学校区であり、同4校合同で児童生徒による諸活動や教職員による各会議の設定は決して容易でなく、連携についても4校合同には図りやすいとは言えない。この「魅力ある学校づくり」の取組を通じて、4校の小中連携を推進することができると考えた。

また、平成30年度の宮古市内中学校の不登校の状況としては、新規不登校生徒が発生する状況がみられたことから、本事業のさらなる展開が求められ、モデル学区での取組を市内各校に周知することで、市内全体の不登校の状況を改善できると考えた。

## III 研究の内容と方法

1 モデル学区の4校による、児童生徒にとっての魅力ある学校づくりを推進し、不登校等の未然防止につながる小中連携、小小連携の組織的、効果的な取組の計画と見直し（P D C Aサイクル×3回の実施）

- (1) 研究推進中学校区において「魅力ある学校づくり推進委員会」を組織し、実態把握及び目指す児童生徒像を共有し、研究全体構想の立案をする。
- (2) 研究全体構想、意識調査による実態把握をもとに手立てを検討し、教育委員会担当指導主事の指導助言をもとにP D C Aに基づく計画的、組織的な取組を進める。
- (3) 学期末には、意識調査結果を検証し、教育委員会担当指導主事による指導助言をもとに、中学

校区における小中連携・小小連携の組織的・効果的な取組について振り返り、次学期の取組を検討する。

- 2 所管する中学校区の全域において、児童生徒にとっての魅力ある学校づくりを推進するため、各学校及び中学校区の創意工夫をいかした取組に関する教育委員会の役割と具体的な働きかけ
  - (1) モデル校にて実施した年間3回の意識調査に基づく校内研究会や学年会議の在り方等、モデル校の成果を各校に周知、取組を推進する。
  - (2) 市事業（校長会議・生徒指導研修会等）において、事業説明と取組状況の共有を図り、事業推進を図る。
  - (3) モデル学区での実践内容について、リーフレット等を活用し、全市、全県に周知を図ることで、市内の取組の活性化を図る。
- 3 不登校等の未然防止につながる小中連携、小小連携の効果的な取組に関する教育委員会の役割と具体的な働きかけ
  - (1) 年間3回の意識調査を市内全域で実施し、担当指導主事とともに集計及び分析、それを基に各学校で分析し、手立てを検討することで、不登校未然防止に向けた意識の向上を図る。
  - (2) 市内各中学校区における小中連携にかかる取組について状況を把握し、「魅力ある学校づくり調査研究事業」との関連を説明することで事業推進を図る。
- 4 年間3回の意識調査と計画表を活用したP D C Aサイクルに基づく計画的、組織的な取組の周知及び実施に関する教育委員会の役割と具体的な働きかけ
  - (1) 年間3回の意識調査に基づく校内研究会や職員会議への担当指導主事の参加と助言を行う。
  - (2) 効果的な計画表についての情報提供と共有を図り、各校の取組を支援する。

## IV 調査研究事業の内容

### 1 「魅力ある学校づくり調査研究事業」における「不登校」の基本的な考え方

#### (1) 不登校の「新規数」と「継続数」

本事業においては、不登校の児童生徒（【資料1】）を「新規に不登校となった児童生徒」と「継続して不登校状態にある児童生徒」に分けて捉えること（【資料2】）から始まる。

「新規に不登校となった児童生徒」とは、前年度は不登校状態にはなかった児童生徒であり、「継続して不登校状態にある児童生徒」とは、前年度も不登校状態にあった児童生徒のことである。なお、「不登校」とは、児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査にある「不登校」の定義により、年間30日以上欠席した児童生徒を指す。

#### 【資料1】令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 「5. 小・中学校の長期欠席（不登校等）」

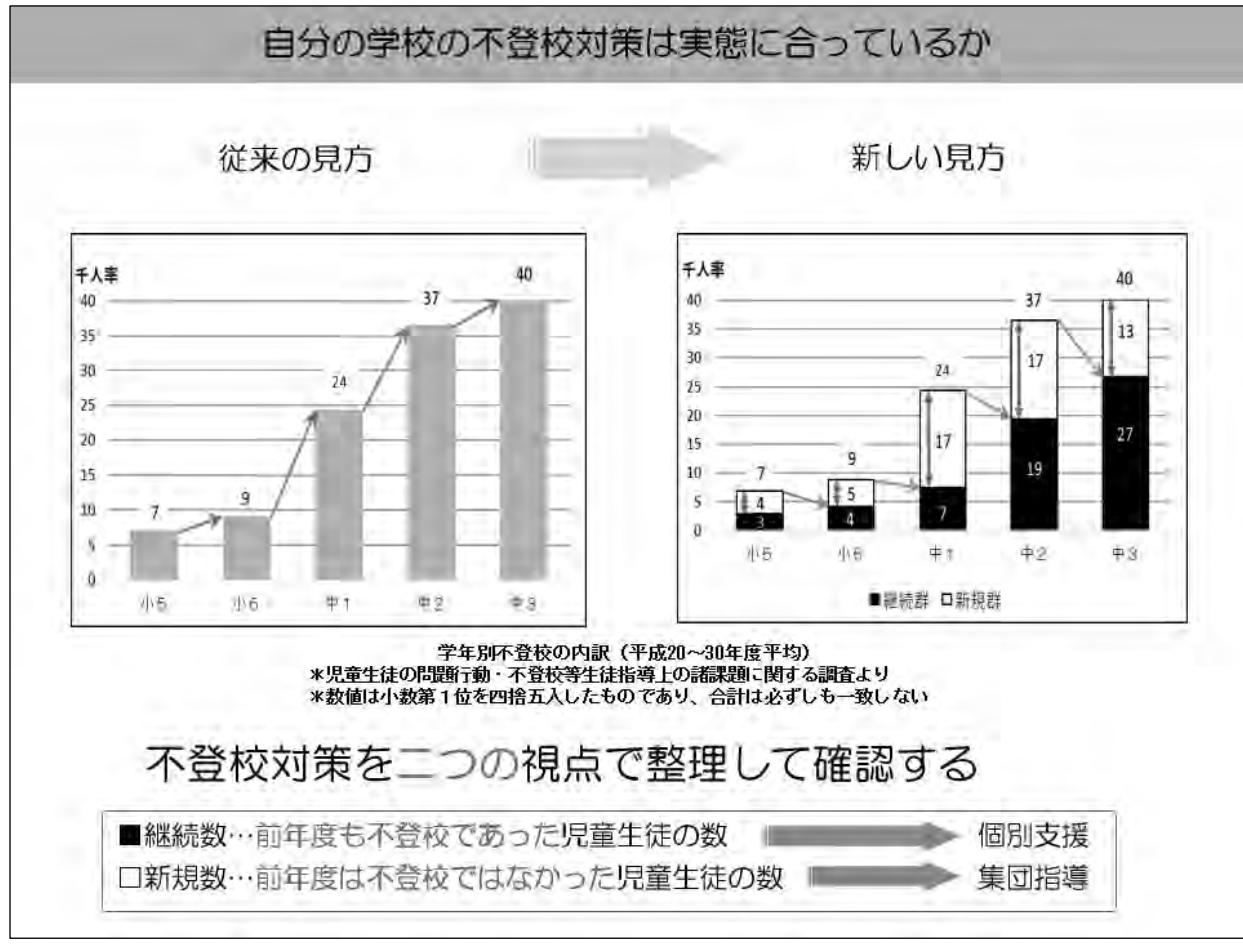
（注3） 年度間に連續又は断続して30日以上欠席した児童生徒数を理由別に調査。

- ① 「病気」には、本人の心身の故障等（けがを含む。）により、入院、通院、自宅療養等のため、長期欠席した者を計上。（自宅療養とは、医療機関の指示がある場合のほか、自宅療養を行うことが適切であると児童生徒本人の周囲の者が判断する場合も含む。）
- ② 「経済的理由」には、家計が苦しく教育費が出せない、児童生徒が働いて家計を助けなければならない等の理由で長期欠席した者を計上。
- ③ 「不登校」には、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的理由」による者を除く。）を計上。
- ④ 「その他」には、上記「病気」、「経済的理由」、「不登校」のいずれにも該当しない理由により長期欠席した者を計上。

\*「その他」の具体例

- ア 保護者の教育に関する考え方、無理解・無関心、家族の介護、家事手伝いなどの家庭の事情から長期欠席している者
- イ 外国での長期滞在、国内・外への旅行のため、長期欠席している者
- ウ 連絡先が不明なまま長期欠席している者

**【資料2】不登校の「新規数」と「継続数」 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター資料より**



※ 従来の見方だと、不登校数は学年を追って増えている。各学年の不登校を「新規数」と「継続数」に色分けした新しい見方をすると、不登校数は学年が上がると一度減る。しかし、「継続数」が減った以上に「新規数」が増えているので結果的に学年が上がると不登校が増えている。

(2) 「魅力ある学校づくり調査研究事業」において対象とすべき児童生徒

本事業において、主として対象とすべき児童生徒は、現在不登校状態にある児童生徒ではなく、現在学校に来ている児童生徒である。対象とすべき児童生徒への支援の取組の違いを意識することで効果的な不登校対策を目指すことが重要である（【資料3】）。現在不登校状態にある児童生徒を学校復帰させることのみを目標にするのではなく、社会的に自立することを目指す必要があること。特別な配慮が必要な児童生徒に対しては、初期段階からの組織的（教員に加え、S C・S S W等多職種による「チーム学校」），計画的な支援が必要であること。上記以外の児童生徒へは、不登校にならない未然防止の取組をすることが重要である。

本事業は、不登校数を減少させるために「現在学校に来ている児童生徒が来続けること」を目的とする。つまり、現在学校に来ている児童生徒を対象とし、その児童生徒が、学校に魅力を感じて登校し続ける学校・学年経験を、教員の同僚性をいかした「チーム学校」で行うことにより、不登校数の減少を目指すものである。

【資料3】2つの「チーム学校」 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター資料より

取組の違いによって組織も変わる			
主たる取組	取組の対象	不登校数減少に向けて	2つの対応組織（チーム）
未然防止 集団指導	前年度不登校ではなかったすべての生徒	新規数を抑制する	教員の同僚性をいかした組織（チーム）
初期対応 個別支援	上記のうち兆しの見えた生徒		自立支援 のSC、SSW の知見を 初期対応にいかす
個別支援	前年度不登校であった生徒	継続数を減少させる等	教員に加え、SC、SSW 適指関係者等 多職種による 組織（チーム）

## 2 「魅力ある学校づくり」に関する基本的な考え方

### (1) 「魅力ある学校」とは

「魅力ある学校」とは、各学校の教職員により、児童生徒が安心して自己存在感や充実感を感じられる場所が提供され、すべての児童生徒が主体的に取り組む活動を通じ、自らが「絆」を感じ取り紡いでいくことができる学校である。このように、学校経営・学年経営を行うことで、すべての児童生徒が、学校に魅力を感じて登校し続けることを目指すものである。

そして、その取組は、どの学校でもすべての児童生徒を対象に毎日行われている。つまり、本事業実施にあたり、目新しく革新的な、教職員主導の活動（「居場所づくり」）や児童生徒の主体的な活動の設定（「絆づくり」）を実施・開発することを目的とするものではなく、これまで各学校・各学年で大切に行ってきた取組を、計画的・継続的に点検・見直しを行い、児童生徒への取組の「浸透度」を高めることにある。

### (2) 「居場所づくり」「絆づくり」とは

本事業においては、各学校の教職員により、児童生徒が安心して自己存在感や充実感を感じられる場所が提供される活動を「居場所づくり」（教職員主導）、すべての児童生徒が主体的に取り組む活動を通じ、自らが『絆』を感じ取り紡いでいく活動を「絆づくり」（児童生徒が主体、教職員の役割は場と機会の設定）とする。

「魅力ある学校」をつくり上げるために、「居場所づくり」と「絆づくり」を区別し、意識的・計画的に取り組む必要がある。教職員主導の「居場所づくり」によって、「安心感」や「親密感」を醸成するだけでは、児童生徒同士の「絆」は紡がれない。「絆づくり」に必要なのは、

自主的・主体的な活動を通して互いを認め合う体験であり、それを生み出す教職員の仕掛け（場と機会の設定）である。

このように、「居場所づくり」や「絆づくり」を通した学校経営・学年経営を行うことで、児童生徒が、学校に魅力を感じ、登校し続けることを目指すものである。

### (3) 「計画的・継続的に点検・見直しを行う」とは

計画的・継続的な点検・見直しには、「意識調査」（【資料4】）を活用する。これは、児童生徒の学校生活についてのアンケートであり、「意識調査」の質問項目のうち、本事業にかかわって「学校は楽しいですか」「みんなで何かするのは楽しいですか」「授業に主体的に取り組んでいますか」「授業はよくわかりますか」の4項目を、4件法で調査を実施する。

この調査項目のうち、学校・学年の実態を踏まえ重点項目を決定、重点項目のうち「当てはまる」に着目し、「『当てはまる』以外を選択した児童生徒が、次回調査で『当てはまる』を選択するため（『当てはまる』と答える児童生徒が増える）には、どのような取組をすればよいか」を協議するものである。

「意識調査」の結果を「子どもの声」として受け止め、教職員の取組が「子どもに伝わっているか」「子どもの声と教員の認識にズレはないか」、指標（エビデンス）を基に検証する。

本市において、この「意識調査」をマークシートによるS Q S (Shared Questionnaire System) を活用し、全市小中学校の小学4年生から中学3年生を対象に実施した。

### 【資料4】意識調査

学校生活にかかわる意識調査【小学校】

吉古市教育委員会

みなさんの学校生活をよりよいものにしていくために、みなさんの学校生活についてお聞きします。

調査式の回答は、該当箇所のマーク<sup>◎</sup>を塗りつぶしてご回答ください。  
空白マーク<sup>□</sup> 三しいぬりつぶし<sup>△</sup> 不十分ぬりつぶし<sup>◆</sup>

この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

(1) 現在の学校生活について、あなたはどのように感じていますか

1 学校は楽しい
2 みんなで何かをするのは楽しい
3 授業に主体的に取り組んでいる
4 授業がよくわかる

(2) 今学校になじめてから今までに、次のようなことを、この学校のだれか（お友だち）からされたり、反対にこの学校のだれか（お友だち）にしましたか。

1 たなれたり、けられたり、強く押されたりした（暴力を受けた）
2 説教ではないが、いじわるさを受けたり、イヤな思いをさせられた
3 たたいたり、けったり、強く押したりした（暴力をふるった）
4 説教ではないが、いじわるさしたり、イヤな思いをされた

(3) あなたの学年を教えてください。  
○ 4年生 ○ 5年生  
○ 6年生

以上で質問は終わります。  
最後にして、先生が回収するまで、静かに待っていてください。

※ 「意識調査」のうち、下段「いじめに関する調査」は参考資料として扱う。

4つの中から、1つを選択

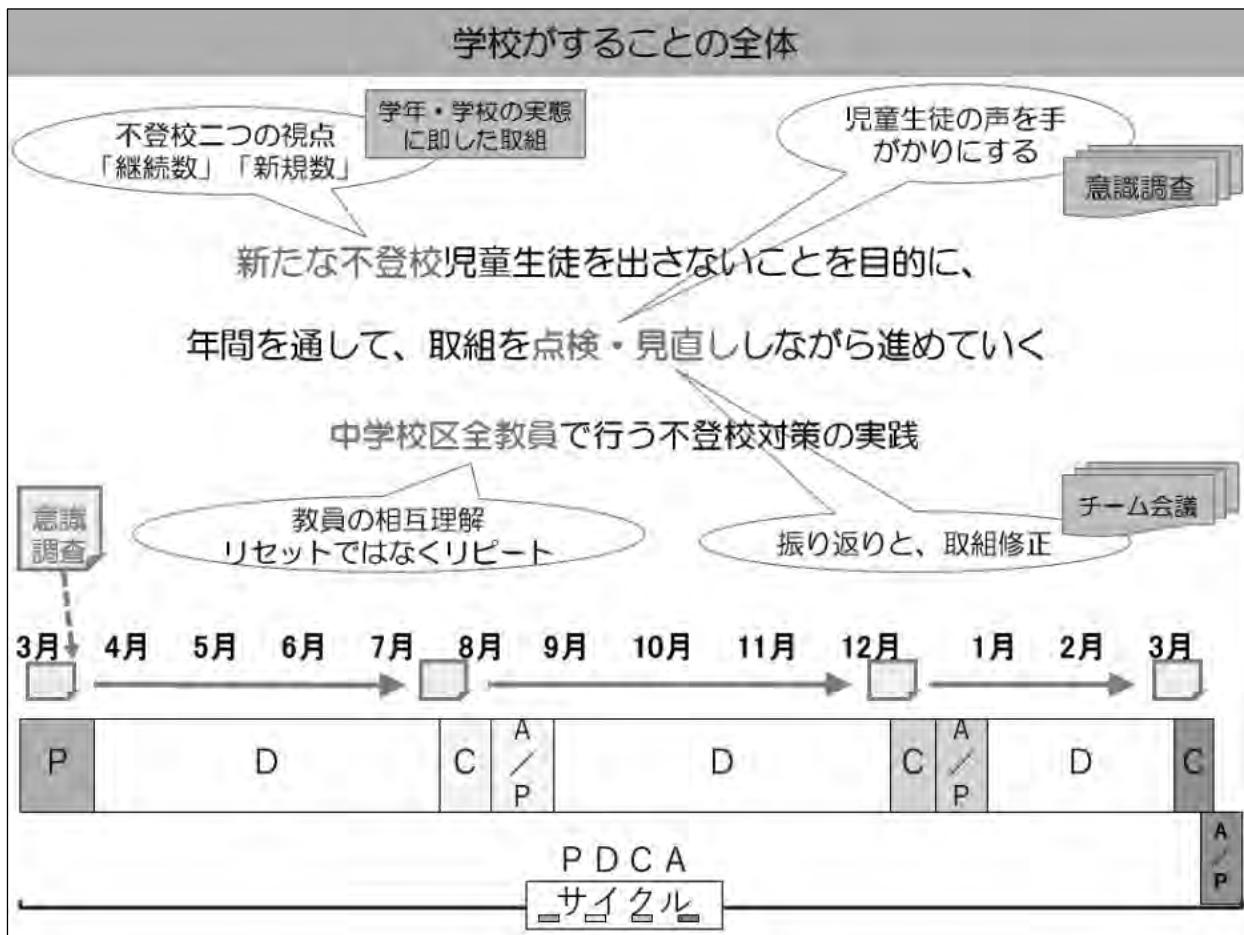
当てはまる	どちらかといえれば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
○	○	○	○
○	○	○	○
○	○	○	○
○	○	○	○

また、各学校による教職員主導の「居場所づくり」と、教職員が場と機会を設定し、児童生徒の主体的な取組を目指した「絆づくり」が、個々の教職員の思い込みや認識のズレにつながっていないのか、計画的・継続的に点検・見直しを行う必要がある。

計画的・継続的な点検・見直しは、年間3回（毎学期末）行う。これは、意識調査の結果を基に次学期の計画立案（P L A N），各学期に取組を実施（D O），学期末の意識調査で、学期の取組を点検（C H E C K），見直し（A C T・P L A N）のサイクルとなる。

この3回の点検結果を基にして次学期の計画を立てること、つまり、PDCAサイクルを年間3回繰り返すことが、本事業の内容となる。（【資料5】）

#### 【資料5】年間3回のPDCAサイクル 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター資料より



#### (4) 「浸透度」とは

本事業の対象は、前述の通り、現在不登校状態にある児童生徒というより、現在学校に来ている児童生徒である。この「普通に」登校している多くの児童生徒に、「居場所づくり」や「絆づくり」の取組や仕掛けが伝わっているか、つまり、取組がどれだけ子どもたちの中に浸透しているか、その「浸透度」が本事業において重要である。

「意識調査」により、教職員による「居場所づくり」や「絆づくり」の仕掛けがどれだけ浸透しているか、その「浸透度」を高めることが、すべての児童生徒にとっての「魅力ある学校」につながるといえる。

#### (5) 「教職員の取組」とは

教職員の取組におけるポイントは、「意識調査」の結果を基にした検証を、教職員全員で議論し、それぞれの取組について「共通認識」し「徹底」して取り組むことである。

議論の内容としては、「意識調査」の結果に、期待された変化が見られた場合には、「何が成果を上げたのか」を共有し、期待されるような変化が見られなければ、自分たちの計画や取組の「どこに問題があったのか」「どこが不十分だったのか」を議論することが必要となる。

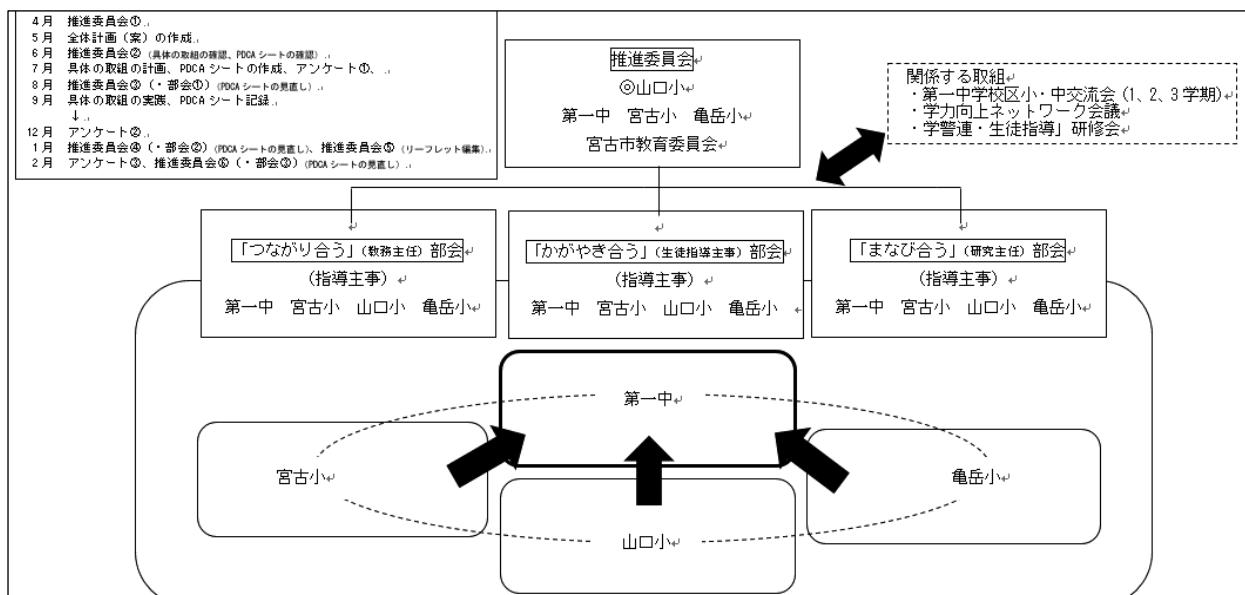
そのために「意識調査」を基にした検証結果、取組内容を一覧にしたものを作成（後述【資料9】）にまとめ、共通認識を図ることが大切である。

### 3 宮古市教育委員会における「魅力ある学校づくり調査研究事業」の取組の具体

#### (1) 「魅力ある学校づくり」推進委員会、主任合同会議の開催

この事業を円滑に実施するため、モデル学区4校の管理職を中心に「どのような子どもたちを育てるのか」、「第一中学校区において『魅力ある学校』とはどういうものなのか」を検討し、事業推進のための組織を立ち上げることからスタートした。この推進委員会（【資料6】）を中心に、4校の学校経営の重点から共通する項目を確認し、「『魅力ある学校づくり』全体計画」を立案した（後述「(2)『魅力ある学校づくり』全体計画」）。また、4校の教務主任、生徒指導主任、研究主任を集め主任合同会議を開催した。

#### 【資料6】モデル学区における推進委員会の組織について



その中で、第一中学校区で行う様々な取組で、連携して行える取組について各部会で協議し、方向性を示した（後述「(4)小中連携、小小連携に係る『部会ごとの取組』」）。

具体的には、学期末に実施した「意識調査」の結果を踏まえ、自校の児童生徒に身に付けたい力を明らかにし、それをもとに次学期の取組を決定した（後述「(3)『意識調査の結果』と『PDCAシート』」）。

また、各学年による調査結果の分析や取組内容を自分の学年の取組に生かすために、令和2年度には、合同研修会を開催した（【資料7】）。これは、モデル学区4校の教員がすべて参加し、同会場で各校の各学年の点検・見直しの共有を図り、今後の取組内容に学年の系統性を生かすことや分析・検討の在り方について共通認識で行うことをねらいとした。

#### 【資料7】第一中学校区合同研修会 令和2年8月3日実施

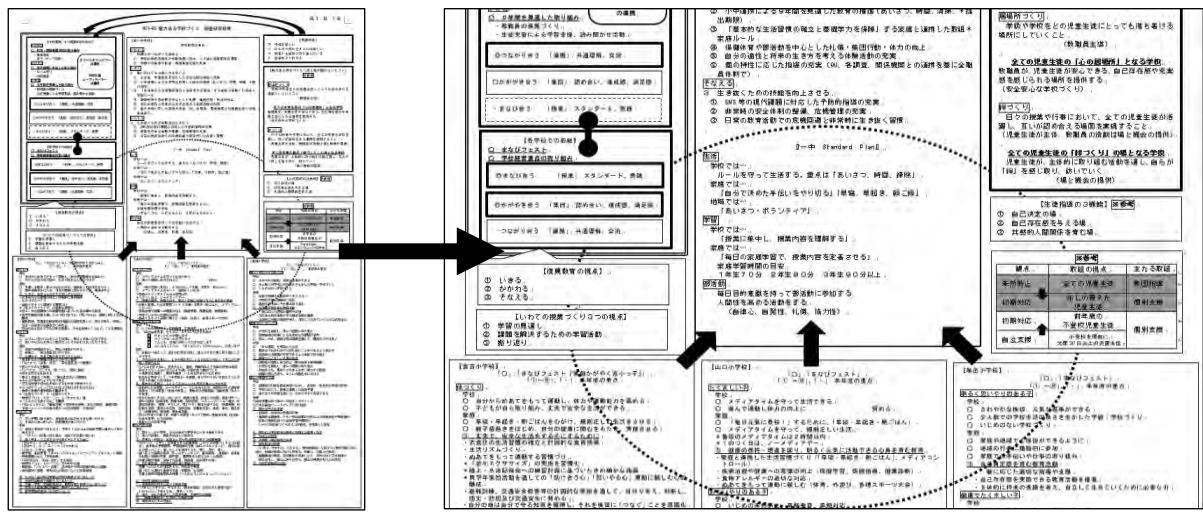


## (2) 「魅力ある学校づくり」全体計画

第一中学校区において、育成すべき児童生徒像を「郷土を愛し、その復興・発展を支え、力強く生きていく子ども」とし、「子どもたちが『まなび合う』『つながり合う』『かがやき合う』学校づくりを目指して」を目標に掲げた。それに向けて、具体的にどのように取り組んでいくのか、本事業の主旨とこれまで取り組んできた各校の学校経営の重点を点検・分析し、4校で共通する点を整理し「全体計画」を立案した（【資料8】）。

小中学校がお互いの取組を知ることで、9年間を見通した児童生徒の育成について小中学校の全職員が共通理解のもと、取り組むことを確認した。

### 【資料8】第一中学区「『魅力ある学校づくり』全体計画」



## (3) 「意識調査の結果」と「P D C Aシート」

令和元年度から本事業の指定を受けるにあたり、平成31年3月（平成30年度3学期末）に、モデル学区とした第一中学校の1～2学年、宮古小学校、山口小学校、亀岳小学校の4～6学年で意識調査を実施した。また、今年度は1学期の意識調査から市内全中学校の1～3学年、及びその学区の小学校4～6学年でも同様の調査を実施した。

なお、意識調査の結果は、宮古市教育委員会にて集計、結果を各校に情報提供した。

意識調査の結果については、「分析シート」（【資料9】）を使い、各学年で学期の取組について振り返り、分析・考察することで次学期の取組に生かしてもらうこととした。また、モデル学区においてはその取組の具体について「P D C Aシート」（【資料10】）を作成し、各学年の取組が共有できるように視覚化することで全職員が共通理解のもと取り組むようにした。

### 【資料9】分析シート

(1) 意識調査分析	
ねらい：「幹づくり」、「居場所づくり」を目的とした取り組みが、どれくらい児童生徒に浸透しているか、その浸透度を把握し、教師側の取組を振り返る。	
例 学校は楽しい	
1学期	2学期
当てはまる	当てはまる
40 %	52 %
取組と結果の考察	
2学期から継続的活動を本格化させたこと。字習業委員会に向けて各担任が学級づくりに力を入れたことで、自己肯定感が育まれたのではないか。	
1 学校は楽しい	
1学期	2学期
当てはまる	当てはまる
%	%
取組と結果の考察	

### 【資料10】 P D C Aシート

該用 P D C A			
⑤ 行動計画 (③の達成に向けた具体的な取組)			
	4年生	5年生	6年生
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認め合う開拓づくりの徹底（キラキラ命の取り組み）</li> <li>・自分の考えを自由に発言できる空気をつくる</li> <li>・自分の考えを安心して話せるよう、自力解決の時間を確保し、お互いに認めあう空気を作れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを書く、伝える。説明する場を設定する。</li> <li>・（全体・グループ・ペア）</li> <li>・自分の考えを安心して話せるよう、自力解決の時間を確保し、お互いに認めあう空気を作れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふり返りや考え方の記述など、自己実現の場を確保する。</li> <li>・全体やグループで話し合う場で、自分の考えを自由に話せる空気づくりに努める。</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習発表会の3・4年合唱の取り組みでは、よりよい合唱のために、主体的に取り組む姿や対話的に伝え合う姿を積極的に評価する。</li> <li>・行事・目標をもって取り組み、達成感や自己肯定感を高める。</li> <li>・総合的な学習の時間では、グループで話し合う活動を充</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを書く、伝える。説明する場を設定する。</li> <li>・（全体・グループ・ペア）</li> <li>・自分の考えを安心して話せるよう、自力解決の時間を確保し、お互いに認めあう空気を作れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習発表会の取り組みでは、互いにアイデアを出し合ったり、アドバイスしたりすることで、主体的な態度を育てる。</li> <li>・授業の中で、児童の思考に沿った展開に努める。また、生活の中で、児童が意思決定して取り組む展開に努める。</li> </ul>

(4) 小中連携、小小連携に係る「部会ごとの取組」

#### ア 「つながり合う」部会の取組

##### (ア) 具体の実践

###### ① キーワードと取組

#### 【令和元年12月～令和2年3月のキーワードと取組】

「魅力ある学校づくり」調査研究事業  
 ( 第一 ) 中学校区の取組  
 「つながり合う」・「かがやき合う」・「まなび合う」  
 (実践) (生徒指導) (研究)

( つながり合う ) 部会

**【取組】**  
**【キーワード】** そろえる

【いつ】 12月 冬休み中 冬休み明け 2月 3月

【だれと（だれが）】  
**【小】児童、保護者  
 【中】生徒（生徒会執行部、部長会、応援団）、保護者  
 【何を】**

新入生説明会

- ノーメディアウィーク（日程を合せる）

↓

居場所づくり 担づくり わかった・できた

※一人（各校、個人）の一歩より皆（学区、組織）の一歩！！

#### 【令和2年2月17日「主任合同会議】



#### 【令和2年9月～12月のキーワードと取組】

「魅力ある学校づくり」調査研究事業  
 ( 第一 ) 中学校区の取組  
 「つながり合う」・「かがやき合う」・「まなび合う」  
 (実践) (生徒指導) (研究)

( つながり合う ) 部会

**【取組】**  
**【キーワード】** より深いつながり  
 (学校・家庭・地域)

【いつ】 9月 10月 11月 12月

【だれと（だれが）】  
**学校と学校(行事、取組)  
 生徒と児童(行事、取組)  
 学校と家庭(ノーメディア Week)**

教務同士の連絡・調整

【何を】

- 「ノーメディア Week」の実施（日程を中学校テスト期間に合せる）
- 小中の引継ぎに係る取組の確認
- キャリアパスポートの情報共有と取組内容の確認

↓

居場所づくり 担づくり わかった・できた

※一人（各校、個人）の一歩より皆（学区、組織）の一歩！！

#### 【令和2年4月～7月のキーワードと取組】

「魅力ある学校づくり」調査研究事業  
 ( 第一 ) 中学校区の取組  
 「つながり合う」・「かがやき合う」・「まなび合う」  
 (実践) (生徒指導) (研究)

( つながり合う ) 部会

**【取組】**  
**【キーワード】** より深いつながり  
 (学校・家庭・地域)

【いつ】 4月 5月 6月 7月

【だれと（だれが）】  
**学校と学校(行事、取組)  
 生徒と児童(行事、取組)  
 学校と家庭(ノーメディア Week)**

教務同士の連絡・調整

【何を】

- 「ノーメディア Week」の実施（日程を中学校テスト期間に合せる）
- 小中の引継ぎに係る取組の確認
- キャリアパスポートの情報共有と取組内容の確認

↓

居場所づくり 担づくり わかった・できた

※一人（各校、個人）の一歩より皆（学区、組織）の一歩！！

#### 【4校合同ノーメディアウィークの取組】

【学習特別強化週間（ノーメディア week）】

◎今年度は、2学期と3学期に行われる中学校の定期テストに合わせ2回実施します。

第1回 ◆2学期期末テスト：11月26日（火）・27日（水）  
 ノーメディア週間：11月21日（木）～26日（火）

第2回 ◆3学期学年末テスト：2月12日（水）・13日（木）  
 ノーメディア週間：2月7日（金）～12日（木）

※ノーメディア週間中は、お子さんが家庭学習（テスト勉強）に取組んでいる時間は、テレビやゲーム、携帯電話等に気を取られず、集中して学習に取組むように声がけをお願いいたします。  
 また、学習時間と睡眠時間をしっかりと確保し、体調に気をつけテストに取組むことができるよう併せてご協力をお願いいたします。

## ② 実践内容

### 【令和元年12月～令和2年3月のキーワードと取組】

キーワード「つながり合う」の取組として、

各校の教務主任で話し合い、「小学生、中学生の交流を深めること。」「教育活動について連携・調整しながら実施していくこと。」を重点として確認し、取り組んだ。

2月の学校行事である、宮古小・山口小の「授業参観」と、第一中学校の「一中オープンスクール（入学説明会）」を同日に行った。時間も調整しながら行うこと、保護者と6年児童が、入学説明会に参加しやすくするとともに、6年生が、中学校の授業を参観したり、先輩の話を聞く時間を設定したりすることができた。

家庭学習に取り組む力の育成を図る「ノーメディアウィーク」の取組期間が同じになるように連絡調整した。4校すべてが同じ期間に取り組むことで、児童・生徒がより意識しながら取り組むことができた。

### 【令和2年4月～7月のキーワードと取組】

キーワード「より深いつながり（学校・家庭・地域）」の取組として、

これまでの振り返りをもとに「ノーメディアウィークの取組をより効果的にすること。」「小・小、小・中の間の連携をより深めること。」を確認し、取り組んだ。

年間4回（6月・10月・11月・2月）実施する「ノーメディアウィーク」の日程について、第一中学校のテスト期間に合わせて実施することを確認した。家庭で、兄弟と一緒に取り組めるようにすることができた。

キャリアパスポートの記録の内容や、進め方について情報共有した。各校の実態に合わせて進めると共に、3つの小学校の児童が、一つの中学校に進学することを、教職員も意識することができた。

コロナ禍の中で、できることを考えながら、前年度の活動を生かして小・中間の引継ぎを行っていくことを確認した。

### 【令和2年9月～12月のキーワードと取組】

キーワード「より深いつながり（学校・家庭・地域）」の取組として、

これまでの振り返りや保護者アンケートの記述などをもとに「これまでの取組を確実に実施すること。」を確認した。

今年度の残り3回（10月・11月・2月）の「ノーメディアウィーク」の日程について、日程の確認をした。児童・生徒・保護者が「家庭学習を頑張る。」という意識を高めることができた。

山口小学校のキャリアパスポートを例にあげながら、それぞれの学校の取組方や進捗状況を交流した。本来の取組のねらいを意識しながら、中学校・高等学校につなげることを確認することができた。

小・中学校間の引継ぎを確実に行うだけでなく、生活習慣や文化活動など、コロナ禍の中でできる交流について、協力していくことを確認した。

## (イ) 成果と課題

### ① 成果

- ・家庭学習の取組の、きまりや日程をそろえて実施することで、家庭学習での小・中学校への共通の取組とすることができた。兄弟・親子で一緒に取り組むことになり、意識化が図られることにつながった。
- ・中学校への入学説明会の際に、保護者だけでなく児童も中学校を訪れて、授業を参観したり、話を聞いたりすることは、中学校進学への不安を軽減し、中学校生活に対する前向きな気持ちをもたせることにつながった。

### ② 課題

- ・他の部会「かがやき合う」「まなび合う」との、連携を深めて、様々な視点からみた手立てを確実に行えるように調整する。

## (ウ) 事業推進上の留意点と今後の展望

- ・事業の本来のねらいと、部会の役割を意識しながら、具体的な取組を実践すること。
- ・他の部会「かがやき合う」「まなび合う」との、連携を深めて、様々な視点からみた手立てを確実に行えるように調整する。

## イ 「かがやき合う」部会の取組

### (ア) 具体の実践

## ① キーワードと取組

【令和元年12月～令和2年3月のキーワードと取組】

「魅力ある学校づくり」調査研究事業

(第一) 中学校区の取組  
 「つながり合う」・「かがやき合う」・「まなび合う」  
 (教科) (生徒指導) (研究)  
 (かがやき合う) 部会

【取組】  
**【キーワード】 居場所  
自己有用感**

【いつ】 12月 冬休み中 冬休み明け 2月 3月

【だれと(だれか)】 6年生と中学生

【何を】 オープンスクール

【目的】 学生自身で協力し、学校生活の充実と向上を図るために諸問題の解決に向け、計画を立案し協力することで自主的、創造的に取り組む意欲を養う

居場所づくり 総づくり わかった・できた

```

graph TD
    A[居場所づくり] --> B[総づくり]
    B --> C[わかった・できた]
    style A fill:#e0e0ff,stroke:#000
    style B fill:#e0e0ff,stroke:#000
    style C fill:#e0e0ff,stroke:#000
  
```

次一人（各校、無人）の一步より前（学区、組織）の一步！！



## 【令和2年4月～7月のキーワードと取組】

「魅力ある学校づくり」調査研究事業

( 第一 ) 中学校区の取組  
 「つながり合う」・「かがやき合う」・「まなび合う」  
 (教科) (生徒活動) (研究)

( かがやき合う ) 部会

**【取組】**

**【キーワード】 居場所  
自己有用感**

**【目的】**

4月 5月 6月 夏休み中

【だれと (だれか)】

**4校の児童生徒全員(児童会・生徒会)**

**【何を】**

- そらえる 4月…あいさつ運動  
5月…地域をきれいにしよう  
6月…ノーメディアWeek
- 工夫する 夏休み中…「みんなが笑顔になるために」活動  
(児童・生徒会活動交流会)

**【目的】**

「みんなが笑顔になるために」の取組を通して、主体的に円滑な人間関係づくりについて考え、意識力を高める。

居場所づくり  
体づくり  
わかった・できた

## 【令和2年9月～12月のキーワードと取組】

「魅力ある学校づくり」調査研究事業

( 第一 ) 中学校区の取組  
 「つながり合う」・「かがやき合う」・「まなび合う」  
 (教員) (生徒指導) (研究)

( かがやき合う ) 部会

**【取組】**

**【キーワード】 居場所  
自己有用感**

	1	2	3
【いつ】	8月	9・10・11月	11・12月
【だれと (だれが)】	児童・生徒 (教員・家庭)	児童・生徒 (教員)	児童・生徒 (教員)
【何を】	生徒観察と生活リズムの崩れている生徒への具体的なアドバイス  ※昼夜逆転、家庭環境の変化、ゲーム依存、友人関係の変化等	生活アンケート、Q&U等を用いた人間関係の把握、行事(一人一役)の取組を通した連帯感と自己有用感の育成  ※互いに認め合う「医薬かけ」の意図的な使用	ノーティアワーキングの実施、スマート安全宣言の周知  ※相手を傷つけない、諒解を生まれない「言葉遊び」

日常生活や行事への取組の中で、より豊かな人間関係、より良い自己のまとまりにすることのできる「魅力ある学校づくり」

居場所づくり 絆づくり わかった・できた

※一人一人(各校、個人)の一歩より皆(学区、組織)の一歩!!

【ゲーム・ネット・スマホ安全利用宣】

宮古市立第一中学校スマホ・ネット安全使用宣言

私たち一生は、ネット機器を使用するにあたり、以下のことを守ることを約束します。

① メールやラインなどのSNS等は午後9時以降には使用しません。  
それ以外（検索や動画視聴等）は午後10時以降には使用しません。

② ネット上で他人の悪口を書き込みません。

③ 個人情報となる写真や動画などの流出はしません。

④ SNS等で知り合った人は絶対に会いません。

⑤ フィルタリングをかけたものを使います。

⑥ 保護者と決まりをつくるから使用します

**守ります!!**

**ゲームの安全利用宣言**

内閣府「子育て支援法」による規制を遵守  
する方へお読みください

他の人に迷惑をかけることをやめに  
するための規則を守るために規制を設けます。

① 未成年（十四歳未満）の方の利用を止めてください。

未成年の集団でのまじめな育てに止めてください。

② 「ゲーム」は午後9時以降は利用しません。

③ ゲーム利用している間にいわゆる「仮想通貨」などの  
お金や贈り物をしません。あきらめません。

④ ゲーム内のアバターの写真や動画を撮りません。

⑤ 自分や友達の個人情報をばらしません。

**私たちのルール**

## ② 実践内容

### 【令和元年12月～令和2年3月のキーワードと取組】

キーワード「居場所・自己有用感」の取組として、

小学校では、児童会企画として、「温かい言葉の木」や「思いやりわくわくプロジェクト」と称し、児童自ら積極的に言葉かけについて考え、使用し、相手に対する「思いやり」の言動を可視化し、共有する取組を行った。

中学校ではオープンスクールとして、入学に対する不安を解消し、中学校生活に希望を持たせることを目的とし、緊張している小学生に対してどのような言動が適切かを考えたのち、各小学校6年生に対する体験授業や生徒会活動紹介の他、中学校の校歌を教える取組を行った。

### 【令和2年4月～7月のキーワードと取組】

キーワード「居場所・自己有用感」の取組として、

小学校では1年生が安心して学校生活をスタートさせることをねらいとして、6年生が昇降口でのあいさつ、教室まで送る、朝の準備の手伝い、読み聞かせ等を行った。また、学年ごとに笑顔あふれるために、どんなことに取り組めば良いのか話し合い、「スマイル宣言」をした。縦つながりを深めるためと高学年とのリーダー性と下学年に対する思いやりの心を育むことをねらいとして、高学年が低中学年の学校生活がより楽しくなるための休み時間の遊び、朝学習での学習支援、巨大絵の完成活動を行った。

中学校では体育祭取組の振り返りとして、感謝のメッセージを学級や縦割り組団一人ひとりに書き、学級に掲示したり、学級通信として配布したりして、お互いの思いを共有した。

### 【令和2年9月～12月のキーワードと取組】

キーワード「居場所・自己有用感」の取組として、

小学校では1学期の活動の充実を図るとともに、個人を大切にするために、いじめにつながるあだ名で呼ばず、名前で呼ぶ取組を行った。また、小学校の課題であるゲームの遊び方について、「3小共通 ゲーム安全利用宣言」を作成し周知した。

中学校では「心とからだの健康観察」や「いじめアンケート」をもとに、担任が生徒一人ひとりと面談を行った。また、1学期にも実施した「ネット・スマホ安全利用宣言」として各家庭での決まり事を再確認した。

## (イ) 成果と課題

### ① 成果

- ・児童が互いの良さに対する気づきが生まれ、認め合う態度が育ってきた。
- ・生徒の日常の活動や行事での取組において、心地良い人間関係を実感し、それを求める言動が多く見られるようになった。
- ・小学校3校による「ゲーム安全利用宣言」が策定され、既存の宮古地区中学校連合生徒会による「ネット・スマホ安全利用宣言」へつながりが期待され、小中学校の連携ができた。また、「ノーメディアウィーク」とともに、学校・家庭・地域での取組が可能となり、SNSに関わるトラブルを未然に防ぐ効果も期待される。

### ② 課題

- ・今年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から、計画の大幅な変更と見直しが必要となった。結果的に他校との取組の交流から他校と足並みそろえた取組へと、発展することができなかつた。

## (ウ) 事業推進上の留意点と今後の展望

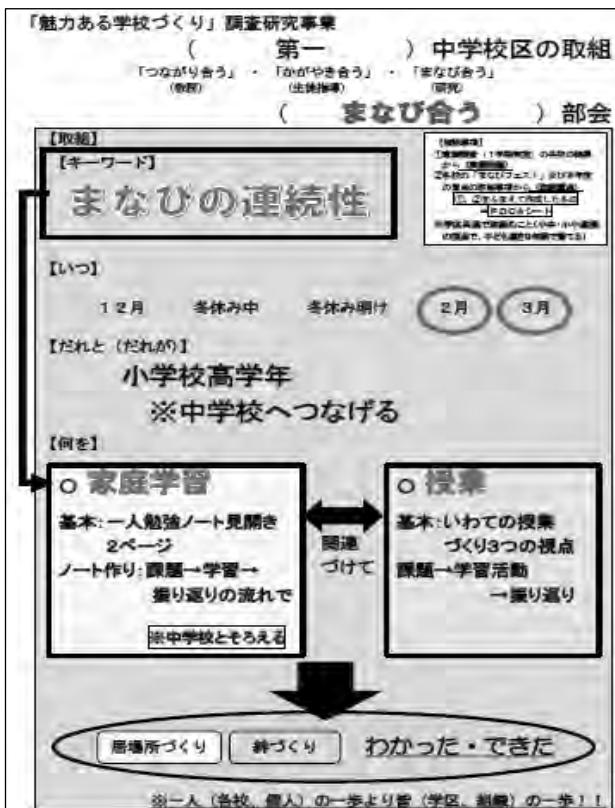
- ・今回の事業をきっかけにして、各校の「かがやき合う」具体的な取組のいくつかを、同時期に児童会・生徒会の連携として実施する。

## ウ 「まなび合う」部会の取組

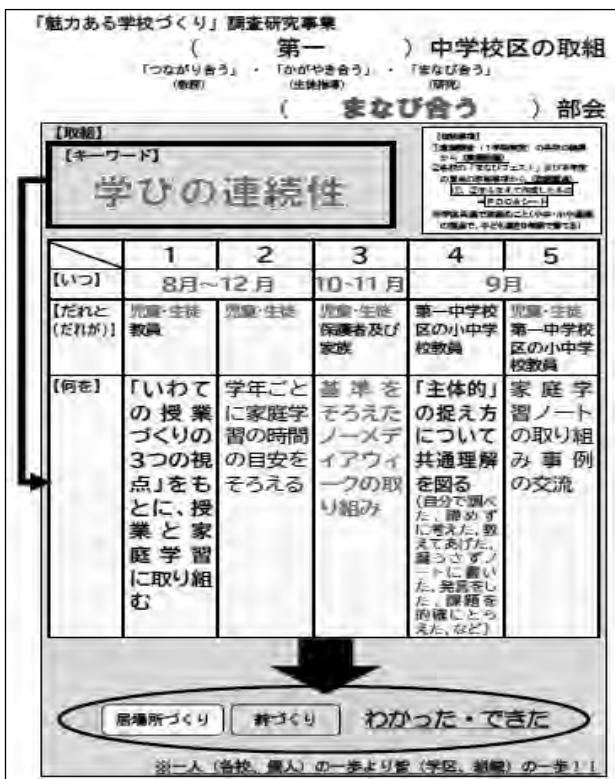
### (ア) 具体の実践

#### ① キーワードと取組

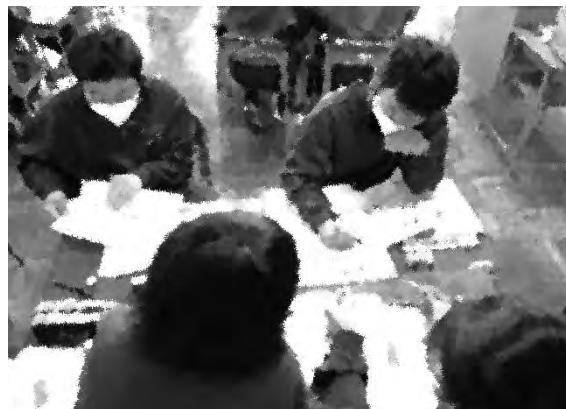
【令和元年12月～令和2年3月のキーワードと取組】



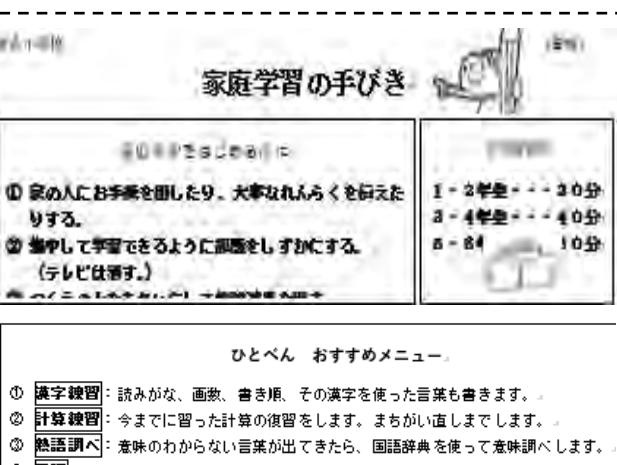
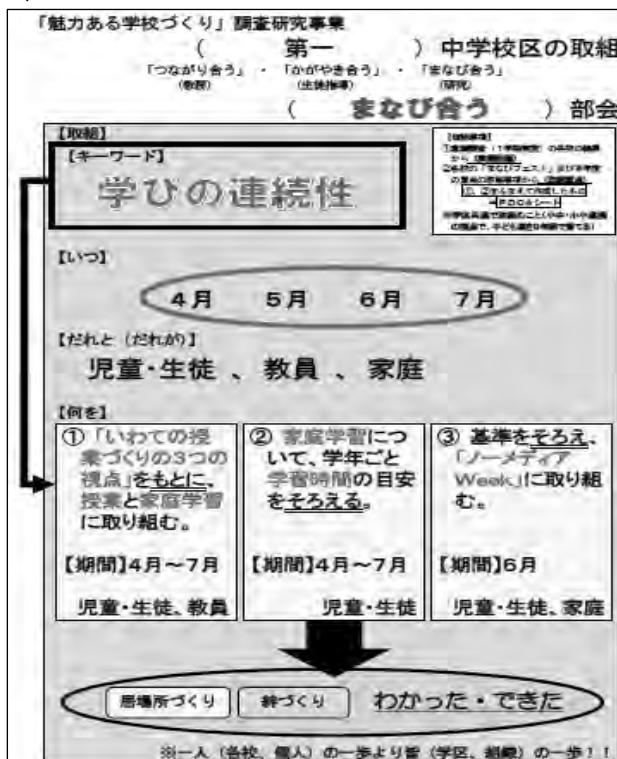
【令和2年9月～12月のキーワードと取組】



### 【 学習活動の様子 】



【令和2年4月～7月のキーワードと取組】



## ② 実践内容

### 【令和元年12月～令和2年3月のキーワードと取組】

キーワード「まなびの連続性」の取組として、

- ・「いわての授業づくり3つの視点」を基本とし、授業実践を重ねる。

- ・授業と家庭学習を関連付けて取り組む。

授 業：課題→学習活動→振り返り

学習用具の扱い、課題とまとめの扱い方

家庭学習：課題→学習→振り返り

主体的に学ぶ姿の育成：教師間の共通理解、児童生徒への周知

- ・一人勉強ノートの作り方については中学校とそろえる。

### 【令和2年4月～7月のキーワードと取組】

キーワード「学びの連続性」の取組として、

- ・「いわての授業づくり3つの視点」をもとに、授業と家庭学習に取り組んだ。

- ・家庭学習については、小学校間で家庭学習の手引きを参考に、本校の手引きを見直し改善した。一人勉強ノートについては、共通のフォーマットで取り組むこととし、内容についてもメニューの提示をした。(資料1)

- ・校内での研究授業時、「いわての授業づくり」3つの視点に沿った授業提案をし、確認し合うことで、日々の授業に生かすようにした。

- ・中学校では教師一人一人が「いわての授業づくり3つの視点」をもとにした個人研究テーマを、各教科部会ごとにも同様にテーマを設定し、全員が研究授業を行った。

### 【令和2年9月～12月のキーワードと取組】

キーワード「学びの連続性」の取組として、

- ・「主体的に取り組む姿」を「自分の考えを表せる」とし、小中学校で確認し意欲喚起のために児童生徒に周知したうえで取り組んだ。

「話す」…全体で発表する、ペア・グループで伝える

「書く」…考えを書き表す、振り返りを書きまとめる

- ・取り組み方のよい一人勉強ノートを各階に掲示したり、4校で取組事例の交流をしたりした。

## (イ) 成果と課題

### ① 成果

- ・児童の「主体的に取り組む姿」を引き出すために、その素地となる、学級の雰囲気づくり、教師の姿勢、授業の工夫に、意識して取り組むようになった。
- ・家庭学習の質の向上が見られた。
- ・家庭学習の取組を中学校区の小中学校でそろえたことで中学校入学後の生徒の負荷が大幅に軽減された。
- ・小中ともに学校の研究テーマ以外に各教科や個人で「いわての授業づくり3つの視点」をもとに研鑽を行うようになった。
- ・小中・小小間で連携し同じ視点で対応できるようになった。
- ・中学校の「学校へ行こうday」を利用し授業交流ができた。

### ② 課題

- ・4校で授業を見合って交流する機会がもてる、お互いの校種や児童生徒の実態を捉えながら、必要な授業改善の方向が見つかるのではないか。
- ・家庭学習ノートの交流を早めに行い、長期休業時の家庭学習に生かせるようにすればよかった。
- ・コロナ禍もあったが、小中間・小小間の授業交流の機会をもっともちたい。

## (ウ) 事業推進上の留意点と今後の展望

- ・今後も、考えを表出できる場の設定、どの子も考えをもてるような授業の工夫を重ねていく。
- ・小中学校間で学習規律などの授業のスタンダードも発達段階を踏まえた上で、そろえていく。

## 4 モデル校における「魅力ある学校づくり調査研究事業」の取組の具体

### (1) 宮古市立第一中学校の取組

#### ア 具体の実践

##### (ア) 研究を進めるにあたって

###### ①本校の課題

本校の令和2年度の全校生徒は231名である。グラフからもわかるように、近年不登校生徒が増加しており、H30以降全校の10%近くの割合で出現している状況である。このような不登校生徒の現状を改善することが大きな課題の1つであり、学校全体で取り組むべき重点と考えている。

###### ②魅力ある学校づくりを推進するにあたって

3つの視点「まなび合う・つながり合う・かがやき合う」についての内容は、本校学校経営方針とも重複する部分が多い。そこでこの研究を進めるにあたって新しい実践を行うのではなく、従来本校が行ってきた内容を大切にしながらさらに工夫や整理、連携を深めるなどの方策で研究を進めていくことを確認した。その上で各学年、各部会ごとにP D C Aシートを活用して計画を立てながら実践を進めてきた。

##### (イ) 「つながり合う（社会・地域貢献活動の取組）」についての第一中学校の実践

- ・全校キャリア教育の取組（地域連携）
- ・年間を通じてのボランティア活動（地域連携）
- ・合唱活動を通しての地域への発信（地域連携）
- ・職場体験の小中交流（小中連携）
- ・新入生説明会での小学生との交流（小中連携）
- ・室蘭宿泊研修での交流会（学校間交流）
- ・三校合同合唱交流会（学校間交流）

###### ①地域との連携

地域コーディネーターの協力のもと生徒会を中心に年間を通して様々なボランティア活動を実践している。昨年度はダイヤモンドプリンセス号が宮古港に寄港した際に、お客様に宮古を紹介するおもてなしボランティアを行った。また熊本豪雨災害の際には校内での募金活動にとどまらず、宮古市内数か所でも募金活動を行い、その義援金を宮古市長に届けた。今年度の宮古商店街の花いっぱいボランティアには58名（全校の約4分の1）の生徒が参加するなど、着実にボランティアの意識が高まっていることを感じている。また、毎年全校キャリア教育を行い、地域に生活する12名の講師の先生を迎える、全校生徒が小グループに分かれて講義を受け、職業観や生き方を学ぶ良い機会となっている。



###### ②学区内小学校との連携



昨年度の新入生説明会の際に、学校説明だけでなく、新入生の授業体験、小グループに分かれての中学生から小学生への校歌指導を企画するなど、中1ギャップの解消を図ることができた。また2学年の職場体験の際には学区の小学校2校で体験をさせていただき、交流を深めるとともに中学生の姿を小学生に見せることができた。

(ウ) 「かがやき合う（現代の課題に対応した取組）」での第一中学校の実践

- ・小中で連携したノーメディアウィークの取組
- ・宮古地区生徒会連合での取組　　・1人1人が主役となる行事の設定（体育祭、文化祭など）

①小中で連携したノーメディアウィークの取組

中学校の定期テスト期間に合わせて、年4回学区の小中学校で連携して、ノーメディアウィークを設定し、取り組んでいる。学力の向上や家族のつながりを深めることにつながっていることを実感している。

②宮古地区生徒会の連携した取組

年間を通して、宮古地区の生徒会合同の取組が行われ、「中学生意見交流会」「中学生スマホネットの安全使用情報交換会」を通して、平成30年度には「スマホネットの安全使用宣言」を発信するなど意欲的に活動が行われている。その活動に刺激され今年度一中学区の3つの小学校児童会が合同で、「ゲームの安全使用宣言」を発表した。

(エ) 「まなび合う（9年間を見通した学力向上の取組）」での第一中学校の実践

- ・岩手の授業づくり3つの視点を大事にした授業の実践　・「学校へ行こうday」などの積極的な授業公開

①授業の実践や授業公開

合同会議の場で、「いわての授業づくり3つの視点（見通し、学習活動、振り返り）」を授業の中に統一して設定することを確認し合い、小中で同じ授業形態で指導することによって、中学校に進学した際に違和感なく授業を取り組めるように手立てを組んだ。また「学校へ行こうday」などの授業公開日には保護者の参観だけでなく、市内の小中学校にも案内を出し、教員による交流を積極的に行っている。

イ 成果と課題

①成果

- ・現在の第一中学校の不登校生徒数は16名と決して少ない状況とは言えないが、別室に毎日通える状況になった生徒が数名みられるなど、回復傾向の生徒が増えている。また、今年度、今までの大きな成果として考えられることは新規不登校生徒がゼロ（令和2年11月時点）ということである。今後も不登校生徒10名以下を目指して取り組んでいきたい。
- ・今回の取組を通して、小中学校の先生方で同じ方向に向かって交流を深め、連携する意識ができたことは大きな成果であった。

②課題

- ・各種意識調査の結果を見ると「自分には良いところがある」「夢や希望を持ってますか」といった内容について県の平均よりも低い傾向がみられる。自己有用感、自己肯定感を高めるようなさらなる指導の必要性を感じている。

ウ 事業推進上の留意点と今後の展望

- ・今回の取組で築いた小中連携の意識を切らさず、「魅力ある学校づくり」を今後も学校の重点として掲げながら、さらに実践を深め、全ての生徒が学校が楽しいと感じ、生徒の笑顔が校内に溢れる魅力ある学校をこれからも目指していきたい。



## (2) 宮古市立宮古小学校の取組

### ア 具体の実践

#### (ア) 「つながり合う」活動に関わって

時期	具体的な取組内容
R 1. 2月	新入生説明会（オープンスクール）への参加
R 2. 9月	中学生の職場体験学習の受け入れ
R 2. 9月	小中引継会 (支援の必要な児童の共通理解)
R 1～2	ノーメディアウィークの取組

小中引継会は、今年度新たに実施したものである。通常学級に在籍しながら特別支援の必要な児童の共通理解を図り、少しでも中学校へスムーズな接続ができるなどをねらいに実施。中学校の先生に授業の様子を見てもらい、その後、資料をもとに児童の特徴や支援方法等について話し合った。

#### (イ) 「かがやき合う」活動に関わって

##### ①「5つのアクション」の取組（R 1・2）

心をつなぐ5つのアクション  
口は、人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう  
耳は、人の言葉を最後まで聞いてあげるために使おう  
目は、人のよいところを見つけるために使おう  
手足は、人を助けるために使おう  
心は、人の痛みがわかるために使おう

教師と児童、児童相互の認め合う人間関係づくりのために、年度始めの全校集会時から左記の「5つのアクション」を全校で共有する機会をもった。校内や各教室に掲示し、年間を通して意識化を図った。機会ある毎にこの「5つのアクション」に返して評価していくことで、本校の温かい人間関係づくりの基盤となった。

##### ②「よい言葉にトライ月間」の取組（R 1）

9月には「よい言葉にトライ」の取組を実施。友達から言われてうれしい言葉を一人一人が花びらに書き、全校で大きな木に花を咲かせる取組を行った。友達から言わされたうれしい言葉を集めることで、よい言葉に気付き、意識して声をかける姿が増えた。児童朝会時に執行部から大きな木の紹介があり、全校で達成したことを確かめ合うことができた。

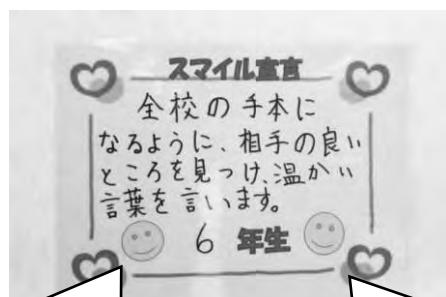


##### ③「スマイル宣言」の取組（R 2）

R 2には「スマイル宣言」の取組を実施。各学年で「一年間を通して、みんなが笑顔で過ごせるような目標」を決め、集会時に宣言を行った。宣言は全校が通るマルチホールと教室に掲示。代表委員会や学期末などに、取組の達成度を紹介し合った。このスマイル宣言は、学級づくりの基盤となりいじめの未然防止にもつながった。

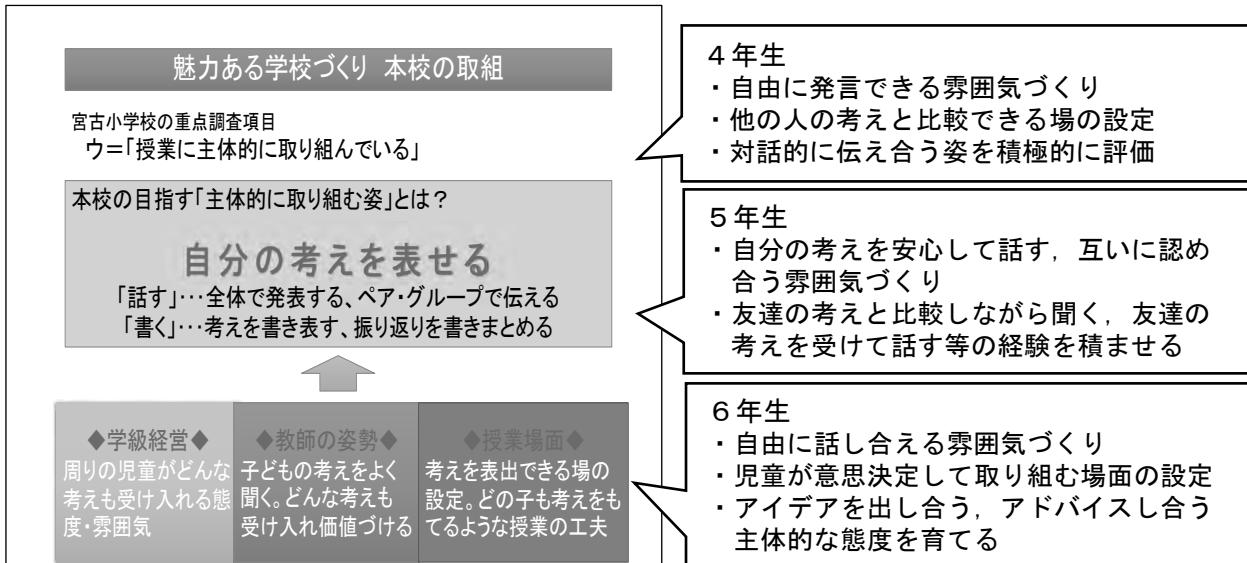


温かいあいさつ・温かい言葉とは何かを考えました。そのようなあいさつや言葉ができたらビー玉を貯めていくビー玉貯金をしてたくさんの方々がたまるくらい温かい言葉やあいさつを使うようにしました。(4年生)



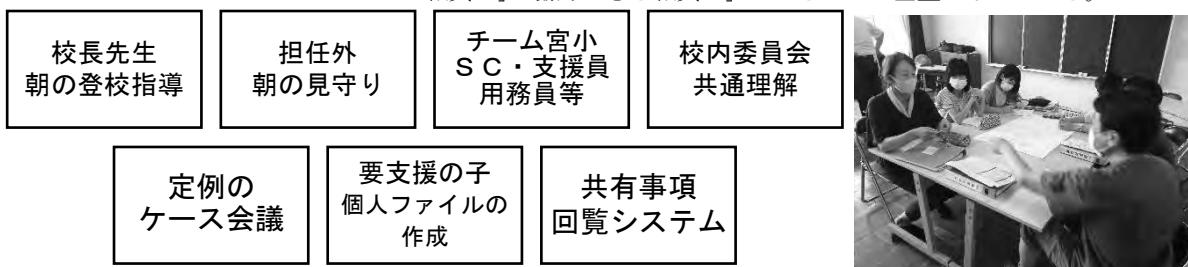
スマイル宣言を達成するために温かい言葉の木を始動。普段から相手のよいところをみつけ、温かい言葉を使い、笑顔であいさつをするようにしました。  
(6年生)

(ウ) 「まなび合う」活動に関わって  
重点項目「授業に主体的に取り組んでいる」の取組



(エ) 職員チームでの連携

登校しづらいや支援が必要な児童の様子について、職員が共有できる「風通しのよい職員室」「協力できる職員室」でいることが基盤となっている。



イ 成果と課題

(ア) 成果

①不登校状況

本校は取組を始めた当初より不登校数は0の状態であったが、次のような変化がみられた。

- ・R 2年度 11月現在での全校欠席0の日が16日と増加した。(R元年度は2日)
- ・R元年度に卒業した児童は、R 2年度（中学校1年時）にも不登校0であった。

②「授業に主体的に取り組む」の自己評価数値の向上

	令和元年7月	令和元年12月	令和2年3月	令和2年7月	令和2年11月
4年生				<b>60%</b>	<b>48%</b>
5年生	32%	36%	29%	<b>45%</b>	<b>47%</b>
6年生	57%	58%	44%	<b>58%</b>	<b>65%</b>

③教師・児童の変容

- ・登校しづらいや不適応気味な児童の様子について、職員が共有できる仕組をつくることで、より協同的で協力的な姿勢で、児童の困り感に寄り添いながら支援にあたることができるのである。その結果、そのような児童が再び学級に戻る等、新規不登校の抑制につながっている。

(イ) 課題

- ①限られた時間の中で、職員全員で取組の趣旨や対応の共通事項等をしっかりと確認すること。
- ②「授業に主体的に取り組む」について、より具体的な姿をイメージし、日々の授業場面や指導場面に生かすように努めること。

ウ 事業推進上の留意点と今後の展望

「現在行っている教育活動（授業・行事指導等）の意義が全ての子に届いているかをP D C Aサイクルで点検し、どの子にも自己有用感を獲得させ、その結果として新規不登校を減らす」という本事業の趣旨は、指定の有る無しに関わらず、学校の教育活動の不变の努めであると考える。今後も取組を継続させていきたい。

### (3) 宮古市立山口小学校の取組

#### ア 具体の実践

##### (ア) 「つながり合う」活動に関わって

###### ①宮古市立第一中学校「新入生説明会（オープンスクール）」参加

中学入学を控えた3学期に学区の6年生が、中学校で中学校説明会、模擬授業、生徒会主催のオリエンテーション、第一中学校校歌指導など、中学校の体験活動を行った。中学校の学習・生活に触れる貴重な機会となった。



中学校の様子を聞く6年生

###### ②宮古市立第一中学校生徒の職場体験学習の受け入れ

9月に、中学生が本校に来校し職場体験学習を行った。事務職の仕事や養護教諭の仕事、用務員の仕事などの体験を行った。この機会を捉え、6年生へ中学校生活の様子を伝える場を設けた。中学校生活への不安の払拭と小中連携へつながった。

###### ③亀岳小交流



合同授業の様子

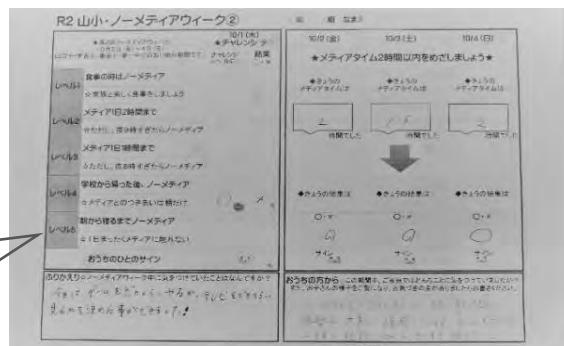
リモート授業の様子

来年度統合予定の亀岳小との交流を実施してきた。コロナ禍のため、1学期はミニレターの交換（活動の様子を伝え合う）になったが、2学期からは、児童健診（亀岳小の児童は本校で行う）に合わせて、合同授業や合同給食を実施してきた。自然教室などの合同行事は、事前・事後の学習でリモートでの授業も行った。

###### ④ノーメディアウィーク

以前より、ノーメディアデーに取り組んできましたが、中学校の期末テストに合わせて期間を決めて行ってきました。シートは、学校独自のものを使っているが、兄弟がいる家庭においては、兄弟一緒に取り組めるので、好評であった。

ノーメディアウィークの中で1日「チャレンジデー」を設定、自分で目標レベルを設定し、取組ます



感想

- 期間中は、ほとんどゲームをしていませんでした。テレビを見る代わりに本を読んだり、絵を描いたりして過ごしていました。
- 毎日お姉ちゃんと一緒にメディアタイムのことを気にして取り組んでいました。
- 土日の休みだと時間が気にならなくなります。タイマーなどを使っていきたいです。

##### (イ) 「かがやき合う」活動に関わって

###### ①宮古市連合生徒会の話し合い活動の見学

昨年度夏に開催された「宮古市連合生徒会」にオブザーバーとして本校の児童会執行部が参加した。参加した児童は、中学生の真剣な話し合いの様子や積極的に意見交換し合う姿に刺激を受け、自分たちの活動に生かしたいという思いに至った。

中学生の話し合いをメモする児童



###### ②キャリアパスポートと連動した行事や児童の活動

各学期の始めに記載したキャリアパスポートとかけっこフェスティバルや学習発表会の学校行事、及び5・6年児童が計画した「全校わくわくプロジェクト」の取組を連動させた取組を積み重ねてきた。子どもたちが自身の成長の姿を実感することのできる意義ある取組となっている。

###### ③児童会の取組として（全校わくわくスマイル宣言）

いじめにつながるようなあだ名を無くすため、あだ名で名前を呼ばない取組を児童会主体で行った。今年度初めての取組であったが、あだ名を使わずに過ごせた人数を調べたり、温かい言葉を言ったり言われたりしたことを紹介するなどの取組を行った。

1年生に声をかける上級生

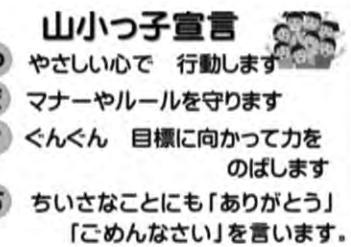


また、縦割り班活動を積極的に取り入れ、「縦割り班での清掃活動」や「縦割り班集会」「縦割り班遊び」など、異学年の交流も進めてきた。

#### ④山小っ子宣言（まなびフェストとの関連）

まなびフェストの中に山小っ子宣言を位置づけ、児童のアンケート調査を通して達成状況を確認している。

「やまぐち」を合い言葉として、よりよい関係づくりを目指して生活している。この部分の児童アンケート肯定率が高く、児童は、意識して生活を送っていることがうかがえる。



#### (ウ) 「まなび合う」活動に関わって



##### ①いわての授業づくり3つの視点

「いわての授業づくり3つの視点」を意識した授業づくりを進め、特に「ふり返り」を授業に位置づけ、メタ認知の力を育成してきた。本校では、魅力ある学校づくりの中で「授業に主体的に取り組んでいる」「授業がよくわかる」にターゲットを絞り、ペア学習やグループ学習を取り入れ実践してきた。主体的に学ぶ具体的な姿を全体で確認し、「積極的に発言する姿のみで判断するのではなく、児童個々のつぶやきや友達の話に傾聴する姿も主体的に学ぶ姿の一つである。」ととらえ、児童にも周知を促しながら主体的に学ぶ児童の育成に取り組んできた。

##### ②自己課題の研究推進とワークショップ型研究会

学校全体の研究テーマだけでなく、個人課題もそれぞれの先生が設定し、それに取り組む中で先生方個々の研鑽を行っている。授業者の手立てが児童にとってどのような効果があったのかをワークショップ型の研究会の中で協議し深めてきた。

#### ③山小スタンダード

従来から授業規律づくりとして、取り組んできたものであり、学区内で、そろえられる部分については、そろえるようにしてきた。授業中には筆入れはしまる、課題とまとめの囲みの線の色を統一するなど、中学校の授業にもつながる形を考えてきた。

#### ④家庭学習の取組

「ひと勉レストランメニュー表」を2・3年生用、4年生以上用に分けて作成し、各自に持たせ、宿題だけでなく、自分に合わせた学習内容に工夫して取り組んでいる。児童の興味を引き出すようネーミングを工夫し、児童が主体的に学習に向かえるようにしてきた。

### イ 成果と課題

#### (ア) 成果

- ① 今年度の不登校状況は、新規の不登校児童が0名。昨年度の不登校傾向児童の2名は、大幅に欠席数が減少した。昨年度の不登校児童1名は、一時期改善された部分があったものの、一進一退が続いている。
- ② 毎日の教育活動の積み重ねにより、学年間の子ども同士のつながりが、着実に深まってきている。また、縦割り活動や行事の取組を通して、学年を超えた子ども同士のつながりも深まっている。
- ③ 突発的な事態や事案に対して、学区内の小中間及び小小間において、垣根なくスムーズに連携がとれ、同じ視点で同じ対応をそろって行える。特にも、今年度はコロナ感染症対策として、行事の検討、実施の仕方の工夫など、頻繁にやりとりが行われ、学区内での横のつながりを強化することができた。

#### (イ) 課題

- ① 教職員の共通認識を一層高める手立てを考慮し、その取組をさらに積み重ねていく必要がある。
- ② 子どもの声をしっかりと聞き、『絆づくり』の視点に基づいた効果的な取組を見いだし、その活動を日々の実践に生かしていく必要がある。

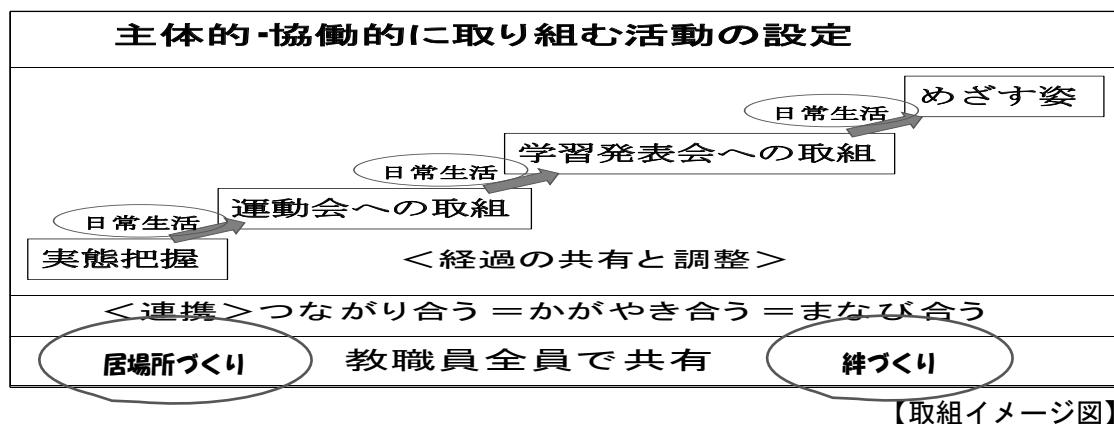
### ウ 事業推進上の留意点と今後の展望

実施のタイミングを確認し、生徒会と児童会の交流の場を設け、小中連携、小小連携の取組を推進し、生徒及び児童の縦のつながりと横のつながりを一層深めていきたい。

#### (4) 宮古市立亀岳小学校の取組

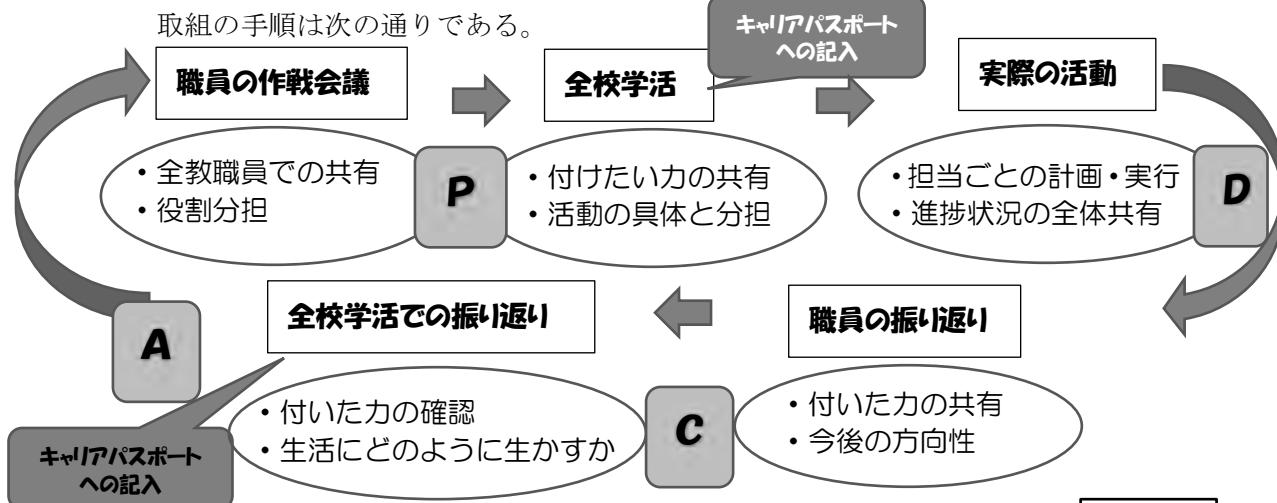
##### ア 具体の実践

本校は児童6名、教職員6名の小規模校であることを生かして、児童に「自分たちで考え、実行する力」を付けることを目指し、各部会が連携して教職員全員での取組を行ってきた。

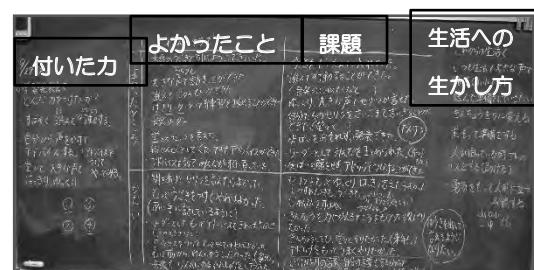


##### (ア) 運動会と学習発表会への取組を通してのキャリア教育

今年度で閉校となる本校は、異学年の児童がお互いのことをよく理解し一緒に活動しているが、これまで大きな行事は地域と一体となって行っており、自分たちで考えて実行するという経験が少なかった。コロナ禍で児童のみの行事となったことをよい機会と捉え、二つの行事を核として日常生活と結びつけながら実践を行うこととした。



【児童の話し合いの様子】



【全校学活での振り返り板書】

##### (イ) 「生活チャレンジ週間」と一体化した「ノーメディアウィーク」の実施

本校では保健担当が中心となって行っていた基本的生活習慣の定着を目的とする「生活チャレンジ週間」と「ノーメディアウィーク」を一体化させ、児童にとってより効果的に、そして保護者にとってより分かりやすい取組を目指した。

また、メディアとのつき合い方について、生活アンケートの実態をもとに全校集会で話を



#### (ウ) 関係づくり

来年度から統合校で、自分のよさを生かしながら多くの人とかかわり合うことが喫緊の課題である。そこで、SSTの手法を用いて、全校集会で帶単元として取り上げて指導している。これまでに、①自分の力を出すための「感情コントロール」、②相手とかかわり合うための「コミュニケーションスキル」、③実際の場（統合校との交流学習や行事）での②を生かした「かかわり方の振り返り」を行って、今後の意欲喚起をした。

また、児童会では「あいさつ宣言」の取組を行い、あいさつを通してよりよい人間関係を築くことを目指した。

#### (エ) 授業づくり

本校は、2・3年と5・6年の複式2学級の構成である。そこで、異学年の学習内容を関連させた気付きを促すための振り返り交流を行っている。よって、学習内容の系統性が見えやすい国語と算数は担任が複式で指導し、振り返りの時間には、他学年の内容と振り返りを互いに聞き合い、学びを関連付け深めている。

#### (オ) 家庭学習

授業と連動した家庭学習の工夫に取り組んでいる。家庭学習ノートも共通のスペースに掲示して、互いに見合い、参考にしながら、低学年でも家庭学習メニューを増やしている。

#### イ 成果と課題

##### (ア) 成果

- ① 全教職員で児童の目指す姿と具体的な取組を共有して実践することで、「自分で考え、実行する力」を児童に付けることができ、児童自身も達成感を感じるとともに自己肯定感の醸成にもつながった。また、児童の成長を感じ取ることによって、教職員の喜びにもつながり、次への実践意欲となった。
- ② 児童、教職員とも少人数であるというよさを生かして、各部会の取組を関連付けて行うことで効果が上がった。

##### (イ) 課題

児童が主体的に活動できるようにするために、アイデアや手立ての話し合いを意図的、日常的に行っていく必要がある。

#### ウ 事業推進上の留意点と今後の展望

小中連携の視点と小小連携の視点をもって、各部会の取組を関連付けるとともに、児童の実態を生かした主体的な取組を行っていきたい。

し、メディアを使いすぎることがなぜよくないのか、「ゲーム障害」の脳内での仕組みについても学習した。さらに、長期休業前にも全校で確認すると共に、休み明けには「生活チャレンジ週間」を設定して生活リズムの確認を行った。

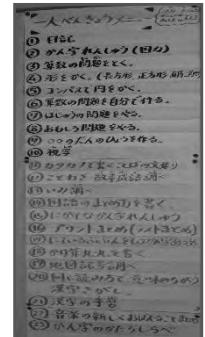
#### 【生活チャレンジカード】



#### 【全校集会での話】



#### 【家庭学習ノート掲示とメニュー表】



## V 研究のまとめ

宮古市では、教育を取り巻く現在の社会情勢や将来の展望を十分に踏まえ、子どもの「生きる力」を育み健やかな成長を促すために、知・徳・体にわたる「生きる力」をより具現化し、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力をバランスよく身につけるため、子どもの学びの過程を質的に高めることを目指している。

また、東日本大震災、平成28年台風第10号及び令和元年台風第19号後の子どもに対する中長期的な心のケアと震災等を通して学んだ命の尊さ、自助及び共助の経験を生かした取組を今後も継続して進めていく必要がある。

今回取り組んだ「魅力ある学校づくり調査研究事業」もその1つである。子どもたちの「居場所づくり」を通して、小・中学校9年間で資質・能力を身につけるよう中学校区で連携すること。「特定の児童生徒」のみを対象とするのではなく「すべての児童生徒」を対象にし、児童生徒が主体的に取り組む「絆づくり」を通して、子どもたちだけではなく、教員も魅力を感じるような学校・学級運営を行うことが、本市の目指す教育につながると考える。

以下に、「魅力ある学校づくり調査研究事業」を推進することによる効果について述べ、研究のまとめとする。

### ○ 教職員の「居場所づくり」、児童生徒の「絆づくり」による、不登校の新規抑制

モデル学区に指定した第一中学校、宮古小学校、山口小学校、亀岳小学校における、不登校数の減少は大きな成果である。特に、中一ギャップが懸念されていた第一中学校においては、本事業指定以前と比較し、中学校1年生での新規不登校が出ておらず、今後も本事業に取り組み、意識することで全体の不登校数の減少が期待される。

また、学区の小学校においても、新規不登校が出ていない状況は特筆すべきところである。これも、小学校1学年から6学年、特別支援学級を含む学校全体で「居場所づくり」と「絆づくり」に取り組んでいる成果である。

### ○ 教職員が「共通認識」で取り組むことによる、教職員の同僚性の高まり

本事業は、学校の新規取組を求めるものではない。既存の取組の意義を見直し、学校・学年が「共通認識」で、取組を徹底させることを目的とするものである。

本来、学校経営においては、「共通認識」で各事業にあたることは当然のこととして求められるものである。しかしながら、「共通認識」のための指標は、教職員個人に委ねられがちである。

そこで、本事業においては、意識調査を基にした「子どもの声」を指標とし、学年全体の児童生徒の学びの姿を協議し、共通認識で取組を行うことで、若手教員も経験豊富な教員も同じ数値を基に「子どもの姿」を語り合うことができるるのである。

本来の学校経営の姿である「教職員の同僚性を基にした、共通認識での取組推進」。いわゆる「チーム学校」の取組が、本事業によって進められたことを実感している。

## 【引用文献】

国立教育政策研究所（2017）, 『P D C A × 3 = 不登校・いじめの未然防止』

国立教育政策研究所（2020）, 魅力ある学校づくり調査研究事業調査研究委員会説明資料『教育委員会が行うこと・学校が行うこと』